HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ペチョーリンにおける「矛盾した」真実（20周年記念号）
Author(s)	出, かず子; Ide, Kazuko
Citation	スラヴ研究, 20, 11-24
Issue Date	1975
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5047
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113009.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ペチョーリンにおける「矛盾した」真実

出　　かず子

И мщенье, напомнив, что я перенес,
Уста мои к смеху принудит,
Хоть эта улыбка всех, всех твоих слез
Гораздо мучительней будет.[1)]

I

小説『現代の英雄』«Герой нашего времени» の主人公，いな，レールモントフの描いた「時代の主人公」ペチョーリンは，絶えず自らの内心の問いに苦しみ，自己反省のうちに解決を求めて自分の内部の動きを仔細に追う。このような意味において『現代の英雄』は，確かにその「時代についての悲しい思索である」といえる。これは同時代のすぐれた批評家ベリンスキーの評言であるが[2)]，その後の研究史においてもほぼ共通に認められるところとなっている。『現代の英雄』をロシア＝リアリズム文学形成における最初の心理小説と見る見解などがそのすぐれた例であろう。あの同時代にあったいま一つの批評，すなわち，この小説に見られるものは現実の歪曲であり，悪徳の礼讃であるという批評は，もはやほとんどその意味を失っている。

しかしながら，ベリンスキーの批評には，さらに進んで，この小説におけるいくつかの不完全さについての指摘がある。その第一は，「作者の描く人物が作者自身に余りに近すぎるために，作者はそれを自分からつきはなして客観化することができなかった」[3)]という不完全さである。この点はその後の研究史においても，ロシア＝リアリズム散文小説の形成過程の一環として，その「不完全さ」の実際のありようが究明されている。事実，この小説を読むものは，その前半に出てくる第一人称の「私」(旅行記記者)，後半の「手記」部分の「私」(ペチョーリン)および作者自身の「私」(レールモントフ)が内容的にたやすく重なり合ってしまうことに気付くであろう。これは近代的ロマンとしての形成の未熟さを示すものであるが，今はこの点には立ち入らない[4)]。さて次に第二に，ベリンスキーは，そこからさらに論を進めて，「ペチョーリンはロマンの初めでわれわれに姿を見せた時と同じ不完全な不可解な存在のままで，われわれの前から姿を消してゆく」と言い，肝心の

1) レールモントフの詩「*** へ」(1830–1831) の一節，М. Ю. Лермонтов, *Сочинения в шести томах*, АН СССР, М.-Л., 1954–1957, т. I, стр. 299. (以下，このテキストから引用する場合は，引用文末尾に巻数をローマ数字，ページ数をアラビア数字でそれぞれ記す)。

2) В. Г. Белинский, *Полное собрание сочинений в тринадцати томах*, АН СССР, М., 1953–1959, т. IV, стр. 266. (以下このテキストから引用する場合は，巻数をローマ数字で，ページ数をアラビア数字で示す)。

3) Белинский, IV, 267.

4) 拙論，「ペチョーリンの夜道の瞑想」(『木村彰一教授還暦記念論文集』所収，朝日出版社，1975年刊行予定)，第 I 節参照。

ペチョーリンの形象にも一種の否定しがたい「不明瞭さ」,「矛盾」があると言う[5]。確かに，この小説を繰り返し読んだものにとっても，例えば最後にペチョーリンが何ゆえにペルシャへ旅立ち，その帰途にいかなる状況と心境で死を迎えたか等の特殊な問題については，余りにも余韻が大きすぎて，しかと理解しにくいものを感じるであろう。そこに「将来の展望」が与えられていないことは，ベリンスキーの言う通りである。しかしながら，ペチョーリンの描写には「不明瞭さ」,「不可解なもの」,「矛盾」があるというベリンスキーの結論は，さらにいっそう概括的なものである。そして，彼の概括的結論の基礎には，一般に人間的現実と人間的価値に関して，ベリンスキーが望み認める限りでの理解が前提となっているように思われる。このベリンスキーの前提は，特に歪んでいるものではないであろうし，また事実，従来の大方の研究にとっても暗黙の前提とされてきたところであった。

本稿は，その前提にあえて多少の疑いをさしはさむことから出発している。それがいかなる前提に対するいかなる疑いであるかについて，まず初めに簡単に説明しておく。

それは端的に言えば，レールモントフが同世代のもろもろの欠陥を寄せ集め，それを極限にまで拡大して描き出した時代の肖像ペチョーリンの中には，ベリンスキーが「望む以上の真実」(VI, 203)，彼が認める以上の真実が含まれていたために，まさにその理由から，その真実の形象ペチョーリンを「不明瞭」,「不可解」な「矛盾」と見なしたのではないか，という疑いである。1840年4月『現代の英雄』が二分冊単行本として初めて出版されたのと前後して，ベリンスキーは，さる決闘沙汰のために当時ある監獄に収監されていたレールモントフをその獄中にたずね，プーシキン，スコット，クーパー等々について大いに語り合ったことが伝えられている。その際，二人の間には一つの口論にまで発展する点があった。それは，現実の人間のうちに現に信頼しうる価値があるか否かに関する，やや深刻な問題であったと推定される。恐らく，ベリンスキーの眼から見れば，レールモントフの知性は冷たすぎ，レールモントフの眼から見れば，ベリンスキーは人間の弱さの認識において甘すぎるように見えたのであろう。その時の模様をベリンスキーはある友人に次のように伝えている。「私は彼と口論した。だが人生と人間に対する彼の知的な冷たい憎悪のまなざしの奥に，あれこれの価値に対する深い信頼の種子を見たのは，私にとって慰めであった。私はこのことを彼に告げた。——彼は微笑して『おことばにあやかりたいものだ』と言った」[6]。レールモントフと同じく，ペチョーリンのうちにもはっきりと読みとれるのは，現実の「人間に対する知的な冷たい憎悪のまなざし」と「価値に対する深い信頼の種子」との避けがたい矛盾であり，このような矛盾した人間的条件のもとにおける冷たい知と熱い祈り，愛と憎しみの混在である。人間においては愛によって憎しみが消えるものではない。もしこのような矛盾を不可解とするならば，ペチョーリンの形象が避けがたく不可解なものになるのは当然であろう。従って，本稿は，こういってよければ，ベリンスキーが望んだ以上の，ペチョーリンにおける矛盾した真の姿をありのままに明らかにすることを目的としている。つまり，これまでペチョーリンにおける「矛盾」とされていたものを，ただ斥けるのではなしに，明らかにすることを目指している。

5) Белинский, IV, 267.
6) Белинский, XI, 509.

この目的のために，本稿は特に，最近『現代の英雄』全体の総決算中の総決算を示す部分とされている最後の短篇「運命論者」の，そのまた結論的部分の再解釈を試みる。すなわち，生活に対するぬきがたい倦怠と嫌悪の情の中で，それにもかかわらずペチョーリンが「私は一切を疑うことを好む。この知的傾向は性格の果断さを妨げはしない。——反対に私に関する限り，私を待ちもうけているものの何かが分からない時，私は常にいっそう勇敢に前進する……」(VI, 347) と結論的に述べているくだりの再解釈である。知られているように，ベリンスキー以来この最後の短篇に関しては，それが読者に「ロマン全体の暗い，魂をひきさくような印象」[7]を与えるにもかかわらず，ペチョーリンの性格づけに何ら新しいものが認められないとする理解が一般的であった[8]。それに対して本稿は，そこに，そしてとりわけ上掲のペチョーリンの結論的表現の中に，ペチョーリンの形象に対してレールモントフがしめくくりとして与えようとした彼の一性格を見いだそうと試みるものである。本稿で用いる方法は，できるだけテキストに即し，そこからすなおに解釈を導き出すこと以外にはない。ということはすなわち，例えば，この小説の中のある個所で，バイロンのマントを好む青年には詩がなく，マテリアリストの医師には詩がある，と書かれているような場合[9]，そのことの意味をこの小説および他の作品のテキストとの関係において可能な限り明らかにしてゆくという方法である。ところで，この方法による場合，小説中の五つの中・短篇のうち，特に「公爵令嬢メリー」がペチョーリンの性格解明のために役立ったことをここに付記しておかなければならない。この意味ではそこに登場する唯一永遠の女性ヴエーラは，必ずしもベリンスキーの言うように「影の如く作者の想像の中をすりぬけてゆく」[10]曖昧な存在ではなかった。テキストの他の個所にも示されているように[11]，ペチョーリンは女性に対する愛情において残酷なまでに冷淡であるとともに，女性からの天使のような愛情の支えなしには生きてゆけないという矛盾した人間の弱さを性格的に備えているように思われる。従って，ペチョーリンにおける矛盾した真実をテーマとし，特に「運命論者」の結論的部分の再解釈を試みる本稿は，のちに見られるように中篇「公爵令嬢メリー」を重く用いることになるであろう。

II

『現代の英雄』に含まれる五つの中・短篇の執筆，出版および各篇の物語りの出来事の時間的順序の問題については，ここでは立ち入らない。普通，物語りの出来事の順序は，ロマンの篇別構成のうえでは第三番目に置かれている「タマーニ」が時間的に第一のものとされている。そしてこれがロマンの構成において第三番目，すなわち後半の「ペチョーリンの手記」の第一に置かれていることの意味についても技巧上の問題があるが，ここではその問題にも深くは立ち入らない。一般には，後半の「手記」は前半におけるペチョーリンの外的行動を内面から説明するものと解されている。ただし，「手記」の第一の短篇

7) Белинский, IV, 261.
8) 金子幸彦「ペチョーリン論」,『スラヴ研究』No. 8, 1964, p. 29, および前掲拙論，第 II 章参照。
9) См. Лермонтов, VI, 263, 268.
10) Белинский, IV, 268.
11) См. Лермонтов, VI, 279, 294.

「タマーニ」には，読めばすぐ分かるように，「ベーラ」その他におけるペチョーリンの外的行動を内面的に説明してくれるような反省の意識，心理の叙述がそれほど見いだされず，そのため，この短篇を全巻中の前半と後半との蝶番の役を果たす章とする見解もある[12]。このように全体のうちで短篇「タマーニ」はとりわけ独自の位置を占めている。今，前述の本稿のテーマを取り扱ってゆく場合にも，従って，ここから出発しなければならない。すなわち，何らかの意味で他人の生活とのかかわり合いが出てこざるをえない外的な行動，その行動をなす者の内的心理の叙述展開の観点から本稿のテーマを解明しようとする場合，短篇「タマーニ」は，出来事の順序のうえで先だつばかりでなく，その後の続く中・短篇における主人公ペチョーリンの心理叙述の展開の出発点にもなっているのである。つまり，時代の肖像の内面的描写において「タマーニ」はまさに掲げられた問いであり，「公爵令嬢メリー」，「運命論者」はそれに対して与えられた答えなのである[13]。従って，分析は先ず「タマーニ」から出発する。

しかし，いかなる方向に出発したらよいか。従来，短篇「タマーニ」は，稀に見る得がたい名文の，ロマンティックな物語の秀作として広く認められている。そしてまさにこのことが研究史上一つの大きな問題を伴っている。すなわち，ロマンティックな物語としての「タマーニ」は，いかにしてリアリズム心理小説としての『現代の英雄』の一構成部分でありうるか，という問題である。時に言われるように，当時まだロシア文学において近代的ロマンの形式の確立されていなかった時期に，それぞれ個別的にはロマンティックな抒情詩，物語詩等々に近いような中・短篇が独自の仕方で組み合わされ，そこにリアリスティックな方向をもつロマンが形成されたと考えられるかもしれない[14]。しかし作品を前にする時，いずれにしてもこうした言い方は余りにも概括的にすぎるように思われ，またその「独自の仕方」なるものがはっきりしない。ここでは，むしろさらに遡って，果たして「タマーニ」がそれほどロマンティックな物語であろうかという点から出発しなおしてみたい。

さて，「タマーニはロシアのあらゆる海岸町のうちでもっともいやな町である。私はそこであやうく餓え死にしそうになったばかりか，おまけに溺死さえさせられそうになった」(VI, 249) という，この簡潔な文章で始まる短篇は，公用で戦闘部隊に赴く途中東方ゲレンジクへの中継地として或る夜遅くその海岸町タマーニに到着した中尉ペチョーリンが，ふとした好奇心から密輸でなりわいをたてる土地の人びととの関係にまきこまれ，そこで体験したほんの一両日の悪夢のような出来事の物語である。事件はペチョーリンの心にもない同情，好奇心がきっかけになって進行してゆく。しかし，初め深夜に辿り着いた小屋の暗い「壁に一個の聖像だにない」(VI, 251) ことがそれら事件の成り行きをあたかも予定しているかのような神秘的な意味づけがなされている。しかも主役を演じる魅惑的な女性，長い亜麻色の髪，しなやかな腰の，そして蛇のようにすり抜け，猫のようにしが

12) Cf. J. Mersereau Jr., *Mikhail Lermontov*, Southern Illinois Univ. Press, 1962, pp. 78–79; R. A. Peace, The Role of *Taman'* in Lermontov's *Geroy nashego vremeni*, *The Slavonic and East European Review*, 1967, Vol. 45, No. 104, pp. 12–29.

13) 出来事の順序のうえではのちのものである「ベーラ」，「マクシム・マクシームィチ」は，この観点からするならば，自らまた別の取扱い方が必要になるであろう。

14) Cf. Mersereau, *op. cit.*, pp. 67, 71, 112.

みつく神出鬼没の十八娘は，幻想的な小説に出てくるヒロインそのままである。そのうえ黒海の月夜の岩壁を背景に貧しい聾の老婆，盲目の少年，恐れを知らぬ密輸団の頭ヤンコを伴って風景，人物の幻想性は，いやが上にも強調されている。ルサールカになぞらえられているその十八娘が，もしこの短篇においても，詩「ルサールカ」(1836) におけるように，ただそのならぬ恋の愁いを歌っているのならば，この小説もバイロン風のロマンティックな物語詩を散文で表わしたものと言えるに違いない。そして詩「ルサールカ」に与えたベリンスキーの讃辞を，そのままこの短篇にも与えることができるであろう[15]。

しかしながら，「タマーニ」のそのようなロマンティシズムについて，ここに一つの疑問が生じる。というのは，夢のように跳びまわる十八娘の，そのようなロマンティックな形象は，ただペチョーリンの主観的な空想の世界のうちのものでしかなかったかもしれないからである。いな，事実そのようなものであった。上述の限りでの十八娘の形象は，叙情詩「初恋」(1830–1831) に歌われていたような「若き日の幻の唯一の名残り」以上のものではない。公用で東方の戦闘部隊に赴く途中，この海岸町まで来たペチョーリンは，黒海の「単調な潮騒」にペテルブルクの「都会の雑音」，そこでの過ぎ去った生活に思いを馳せることが強かった。彼がルサールカの娘のまなざしに見たものは「かつて自分の生活に対して勝手気ままに振るまった，かのまなざし」(VI, 257) の思い出に外ならなかった。ここでのルサールカが口ずさむ歌は，かつての詩「ルサールカ」の幻の恋の歌とはうってかわって海賊の歌なのである。

生身のペチョーリンにとっての実際の「いやな」出来事は，彼がゲーテのミニヨンに見たてた十八娘と交わす他愛のない問答のうちで，その娘から「あなたは沢山見て少ししか知らない」(VI, 257) と言われたことばに対して，心にもなくふともらした脅しの文句がきっかけになって化肉したように現実の世界で展開する。密輸で生活をたてている娘の側からすれば，ペチョーリンはその地方を治める司令官に密告するかもしれない一個の軍人にすぎないし，老婆にとっては「片輪にまででたらめを言う」(VI, 254) 無知で傲慢な若者にすぎず，盲目の少年にとってはすきあらばその持物を盗んでやりたい，都会から来た旅行者にすぎない。ここでの仕事が危険ならヤンコは「ほかの土地に仕事を探しに出かけるまでだ」(VI, 259)。「タマーニ」における土地の人びとの生活の現実はこうしたものであり，ペチョーリンの空想の世界の幻は，「泳ぎを知らない」ペチョーリンが十八娘に誘い出されて危く溺れさせられそうになったのと同じように，きびしい現実の前に消滅するのである。彼は，若き日にレールモントフが自已の「肖像」の詩 (1829) で巧みにたとえたように，嵐の流れが犠牲にかりたてる「一枚のひからびた木の葉」にすぎないのである。

「タマーニ」におけるペチョーリンは，現実にまきこまれた出来事に対して，ひたすら悲しみを感じ，その苦い体験に出会った海岸町をただ「いやな町」と思い知るだけで，ひとときも早く忘れ去りたいものと願う。「長いこと，長いこと …… 私は悲しくなった。運命は何のために私を正直な密輸入者たちの平和な生活の中へ投げ込まなければならなかったのだろう。なめらかな泉の中へ投げ込まれた石のように，私は彼らの平和を乱し，また石のように，自分も危く水底へ沈むところだった」(VI, 260)。「それに公用の駅馬券をもっ

15) См. Белинский, IV, 534.

て旅する将校の私にとって，人間の喜びや不幸など何のかかわりがあろうか！」(VI, 260)。

ここでの「運命」は，かつてレールモントフが自分の肖像の額に押された烙印として見た，あの「情熱」ではもはやない。しかしまた他方，「運命もそれほどすぐには魂を滅ぼさないであろう」(I, 181) と歌ったときのあの戦いの相手としての運命でもない。「疲れ果てた魂は……運命の嵐の中にしぼんでしまった」(II, 109) だけである。何がために運命が彼にそうさせたか，それを知るためには，生活におけるリアルな人間の関係，生活者のリアルな社会関係についてペチョーリンはさらに多くのものを，とりわけ個人に対してすべてを運命的に強いるような力を知らねばならないであろう。この点に関するペチョーリンの反省の意識は，この短篇に関する限りきわめて貧しい。それは皆無に等しいといってよい。ただ，のちとの関係で興味深いのは，身体の不具，女性の容姿の美しさについての彼の特徴的な考え方[16]である。これは後述の彼におけるマテリアリストとしての一面に通じるものであるので，付記しておく。

総じて言うならば，短篇「タマーニ」は，一見奇怪，幻想的に見えるその諸形象によって，ロマンティックな物語であるわけではなく，ペチョーリンがなお甘美な響きに耳を傾け幻の世界の中に住む若い夢想家であるにすぎないのである。ここに見られるのは，幻想への飛翔ではなく，幻想の敗北，すなわち幻滅である。1839 年の詩「自分を信じるな」のことばで表わせば，「タマーニ」でペチョーリンの演じている役割は「ボール紙の剣を振り回わす紅つけた悲劇役者」(II, 123) である。そして『現代の英雄』とは，もともと，このような劇中の悲劇役者，小説中の主人公の反対語であることを目指している。

III

中篇「公爵令嬢メリー」は，周知のように，当時休暇中の軍人の集合地でもあった有名な湯治場ピャチゴールスク，キスロヴォーツクを舞台に繰りひろげられた愛情における人間関係のドラマを日記体の形式で表現したものである。ペチョーリンの日記は，5 月 11 日から決闘前夜の 6 月 16 日夜までで一旦途絶え，その一ケ月半後マクシム・マクシームィチのいる N 堡塁に来てから書きたされた，決闘の日とその翌々日キスロヴォーツクを去る日までの回想の手記からなっている。湯治場での一ケ月余りの出来事は，主だった登場人物の誰にとってもすべてが不幸な破滅に終わる。英語でバイロンを読むうら若き令嬢メリーの愛情は，反転して憎しみに変り，士官候補生のグルシニーツキーは企らまれ，また自らも企らんだ不名誉な決斗に倒れ，ペチョーリンは友のヴェルネルを失って遠い最前線に左遷され，ヴェーラはこの世のすべてを失って再びいずこともなく立去ってゆく。そして万事がこのような不幸な結末に終わる筋全体は，人間の社会に付きものの隠れた運命の仕業ででもあるかのように，運ばれる。場所はカフカース，「太陽は明るく，空は青い——これ以上何がいろうという気がする。何のためにここで，情熱だの，希望だの，悔恨だのがいろう……」(VI, 261)。すなわち，人間の情念が避けがたくもたらす不幸な結果は冒頭からすでに予示されるのである。ペチョーリンには初めから，令嬢メリーをめぐってであれ，その他何であれ，グルシニーツキーと「いつかきっと狭い路上で衝突し，そして

16) См. Лермонтов, VI, 250-251, 256.

どちらか一人がひどい目にあうような気がしている」(VI, 263)。また友人の医師ヴェルネルによっても「気の毒なグルシニーツキーはあなたの犠牲になるだろう」(VI, 271) ことが予感されている。このようにして，人間関係のもつれ合いの進行と共に，運命的な筋が成就してゆく。

ところで，その一連の運命的な出来事が展開し終わる前夜に，決闘を明日に控えてペチョーリンは，自分の果たしてきた役割を次のように受けとめる。「その時以来，私はすでに幾度，運命の手中にある斧の役割を演じたことだろう！ 刑罰の器具として，しばしば悪意なく，常に同情なく，私は運命づけられたる犠牲の頭上に落ちた……私の愛は，誰にも幸福をもたらさなかった。なぜなら，私は自分が愛した者たちのために，何物をも犠牲にはしなかったから。私は自分のために，自分自身の満足のために愛したのだ。私はただ彼らの感情，彼らの優しさ，彼らの喜びや悲しみを貪欲に呑みこむことによって，心の奇妙な要求を満たしたにすぎない――だが決して満足することはできなかった。かくして……残るは倍加された飢えと絶望とである」(VI, 321)。もはやペチョーリンは，かつて「タマーニ」でのように，ただ運命に犠牲を強いられる「ひからびた木の葉」の立場にはない。

しかし他に選ぶべき，そして選びうる道はなかったのであろうか。一ケ月半後 N 堡塁の中でペチョーリンは過去に思いを馳せながら再び自分にこうたずねる。「何が故に私は，運命が私に開いてくれたこの道を進もうとしなかったのか。そこでは静かな喜びと魂の平安とが私を待っていてくれたであろうに……いや，私はそうした運命と仲良くやってはゆけなかったであろう！ 私は海賊船の甲板に生まれて育った水夫のようなものである」(VI, 338)。それでは何が故にペチョーリンの魂は住みなれた穏やかな陸地の生活に退屈を感じ悩みを覚えて荒波狂う嵐の海にひき寄せられ吸い込まれるのであろうか。普通，この中篇末尾の段落は，しばしば抒情詩「帆」(1832) と関連づけて解釈されている。すなわちまず，「孤帆は白む，青海原の霧の中，そは何を遠き国に求める，そは何をふるさとの涯に捨つるや」の一節に初まり，「あゝされど叛逆の子は嵐を願い，安らぎは嵐の中にありという」(II, 62) に終わるこの詩が，当時の頑迷で醜悪なロシア社会に対する叛逆の詩と解され，それを前提として，さきの段落の真意もまた，メリー，ヴェーラ，そしてペチョーリン自身の属するロシア貴族社会に対する叛逆にあったと解釈されるのである。

しかしながら，読めば分かるように，ペチョーリンはもっぱら嵐だけを乞い願う「叛逆の子」であるのではない。ここピャチゴールスクで再会したペテルブルク貴族社会の一貴婦人ヴェーラは，ペチョーリンにとって「欺くことのできない世界中にたった一人の女性」(VI, 280) であり，また自分を「完全に理解してくれているただ一人の女性」(VI, 292) であった。しかもその理解はペチョーリンにおける「誘惑的な邪悪」(VI, 332)，現代社会において邪悪さのもつ魅力について二人だけの共通の理解[17]にまで達していた。「叛逆の子」として運命の斧をその手に握り，あれほど冷酷にひとを欺きえたペチョーリンに，「欺くことのできない」女性が一人でもいたことは大きな謎である。実に，かくも矛盾したペ

17) ペチョーリンは，「果たして邪悪というものはそれほど誘惑的なものであろうか」(VI, 292) と言い，またヴェーラは，ペチョーリンにあてた手紙の中で「誰もそれほど誘惑的な邪悪をもつ人はありません」(VI, 332) と述べている。

チョーリンの真実の肖像は，いかなるものなのであろうか。それを明らかにするためには，この中篇において他の人びとから見られたペチョーリン像，また彼自身の見る自分の肖像を洗いなおして，そこから改めて運命に対するペチョーリンのかかわり合い方を見直さなければならない。本節ではまず二人の女性から見られたペチョーリン像から明らかにしてゆきたい。

この中篇に登場する二人の女性，メリーとヴェーラは，さきのベリンスキーの評言にもかかわらず，「タマーニ」のルサールカ娘がペチョーリンの眼に型にはまった幻と映るロマンティックな形象であったのに対して，少なくともそれと比較すれば，一定の社会関係のうちにリアルに捉えられているといえよう。今や「運命の斧」を手にした邪悪なペチョーリンは，愛の経験に乏しい令嬢メリーの心を空想においてではなく現実にあやつって，意識的に彼女を自分に近づけ，そうすることによって一方グルシニーツキーの仮面のバイロニズムをあばき，男性に対する令嬢のバイロニズム的幻想を打ち砕くとともに，他方女性の嫉妬心を意識的に利用して過ぎ去ったヴェーラとの愛情関係を再燃させようと企てる。このような筋の進行の中にあって，まず第一にメリーの中には，ペテルブルクにおけるペチョーリンの「スキャンダル」の噂話にもとづいて，あらかじめ「新趣味の小説の主人公」というバイロン的なペチョーリン像ができあがる。メリーの眼に映るペチーリンは，自尊心を欠き，不幸な悪意に取りつかれた「人殺しよりも悪い」「恐ろしい人」であり，そうなればこそ，小説の主人公に憧れるメリーのような女性にとっては強い同情と愛情に値する対象であった。しかもペチョーリンから恐怖の感情を植えつけられ，それによって心を支配されればされるほど，彼女にとってペチョーリンは，女性として愛情を寄せるに値する，あるいは愛情を寄せる必要のある対象になるのだった。ペチョーリンにとって，このようなメリーは，やさしい性格と弱い意志の一般女性の一人以上の何ものでもなかった。要するに，バイロン的な小説の主人公の虚像に蔽われて，メリーの眼にはペチョーリンの実像が見えないのである。メリーにおける愛から憎しみへの転換は，彼女の空想的な世界の中でのことに過ぎない。

それに対してヴェーラは，前述のように，ペチョーリンにとって「欺くことのできない世界中にたった一人の女性」(VI, 280)，その「思い出が心に神聖なものとして残る」(VI, 280) 唯一の女性，「完全に自分を理解してくれているただ一人の女性」(VI, 292)であった。これはつねづね「芳香を発する花を……その瞬間に摘み，……心ゆくまで吸って路傍に投げすてるべきだ」(VI, 294) といい，かねがね他人を自分の意志に従属させることをモットーとするペチョーリンにおいては，前述のように，一種説明しがたい関係である。これは何びとかを強く熱愛したいと感じる一時期を過ぎたペチョーリンのただ一人の人から変らぬ愛をもって愛されたいと思う「あわれむべき心の習性」(VI, 279) によるものなのであろうか。ペチョーリンにもしかとは分からない。彼自身もただ「心の奇妙な要求」(VI, 321) としか言いようがなかった。しかしともかく，彼は自分がメリーに近づくことによってヴェーラの嫉妬心をたきつけ彼女との二人だけの機会が与えられることをひそかに予期する。「愛は，火と同じように，糧がなければ消えてしまう。わたしの願望が果たしえなかったことを，恐らく嫉妬が成就させるであろう」(VI, 304)。事実，それは成就した。そのよ

うな出来事のうちでヴェーラの理解するペチョーリン像はいかなるものであろうか。それは決闘の直後にペチョーリンの読むヴェーラの置手紙に明らかである。もともと自分の邪悪さを知るペチョーリンにとっては「いったいなぜ彼女はこれほどまでに自分を愛してくれるのか全く分からなかった」(VI, 292)。自分のうちにある「邪悪というものはそれほど誘惑的なものであろうか」(VI, 292) と疑わざるをえなかった。それに答えるかのように，ヴェーラの残した置手紙には「誰もそれほど誘惑的な邪悪をもつ人はありません」(VI, 332) と書かれている。ピャチゴールスクにおける思いがけぬ再会において，ヴェーラがペチョーリンに繰り返す訴えはいつも「あなたは私に苦しみのほか何ひとつ与えては下さらなかった」(VI, 278)，「つまらぬ疑いや，偽りの冷淡で苦しめないで下さい」(VI, 290) ということであり，またメリーに対する嫉妬によって彼へのゆるがぬ愛を卒直に表わしていた。ざんげにも似たヴェーラの置手紙の示すように，彼女はペチョーリンが単調な人生の退屈さをしのぐための喜びと悲しみの源泉として自分を「所有物」として愛してくれたことを知っており，しかもペチョーリンのこの上ない不幸の深い根が「いまわしいことばかりをみずからに信じこませようとする」(VI, 333) 性格にあることを理解している。これらの理解は，ペチョーリン自身の自己意識と計らずも見事に一致する。なぜなら，彼はみずからをかえりみて次のように言っているからである。「私は他人の苦しみや喜びをも自分に対する関係においてのみ，自分の精神力を支える食物としてのみ見る」(VI, 294)。「私は自分が愛した者たちのために何ものをも犠牲にはしなかった……。私は自分のために，自分自身の満足のために愛したのだ」(VI, 321)。「私には，人にさからってみたいという生まれついての情熱がある。私の全生涯は，感情ないし理性に対する悲しい，不成功な反対の連続に過ぎなかった」(VI, 267)。しかし，いうまでもなくヴェーラのペチョーリン理解は，彼自身の自己理解よりも明確に，すべてを蔽っているわけではない。事実彼女は，ペチョーリンのうちに見いだすものをただ「何か特別なもの」としか言い表わせない。しかしペチョーリンから「完全に自分を理解してくれているただ一人の女性」と言われている通り，彼女の理解はメリーのそれとは比べものにならないぐらい深い。しかもペチョーリンは「自分からは決して自分の秘密を明かすようなことはしない」(VI, 272)，そういう人なのだ。それにもかかわらず彼女の到達しえたこの理解の深さは，いつの日か自分の捧げる犠牲を認めてもらえるというあだな望みが消えてもなお消えることのなかった愛情によるものであったのだろう。メリーの見ていたものが「小説の主人公」に過ぎなかったのに対して，ヴェーラの眼には「何か神秘的なもの」としてペチョーリンの実像が映っていたといえよう。

IV

それでは，ペチョーリンの最もよき理解者のヴェーラにもよく理解されず，ただ「何か誇らかな，神秘的なもの」(VI, 332) としか感じられない彼の生まれつきの中にあるもの，彼自身自らは明かそうとせず，だがそれを「推量されるのを好む」(VI, 272) 性格の秘密は，いかなるものであろうか。

従来このペチョーリンの性格のかくれた秘密を解く鍵とされているのは，彼の「手記」の総決算であり，かつ『現代の英雄』全体の総決算でもある最後の短篇「運命論者」であ

る。しかしながらこの短篇は，このロマンのうちでも最も短い文字通りの短篇であり，また多くのさまざまの解釈，論争の種になる謎を含んでいる。今ここではその短篇の筋の構成，登場する何人かの人物の形象，その他の細部には立ち入らない[18]。しかし，そこで問題にされている謎の論点に全面的に立ち入るためには，その上さらになお幾つかの事柄を整理しておく必要があるであろう。考えられる点としてまずその第一は，ペチョーリンが同世代の貴族青年の一人として自分の生い立ちについて行なっている回想であり，とりわけデカブリストの反乱後のその時代の思想，「形而上学的議論」およびバイロニズムに対する態度の問題がある。その他，第二として，ペチョーリンの生きることと死ぬことについての意味づけ，さらに第三には，単なる小説の中の自然描写，背景としての自然以上の意味を持つかに思われる自然の観念等の問題があろう。本稿では主に「公爵令嬢メリー」のテキストの分析にもとづいて，その第一の問題について集中的に解明を試みる。

まず，短篇「運命論者」のペチョーリンのあの有名な瞑想のうちで彼がその「青春の初めに空想家であったが……いまや幻と闘った夜のあとのような疲労と，後悔に満ちた混乱した思い出だけが残っている」(VI, 343) と自分の生い立ちを述懐し，同世代の人びとが生活において退屈と嫌悪におそわれていると言っていたことが思い出される。このようなテーマは，「われら北方の子は，ここの草木のように花咲くのも束の間，やがて枯れてゆく」(I, 65) というような少年期の嘆き（「モノローグ」，1829）以来韻文，散文を問わずレールモントフの作品に一貫したテーマの一つである。

さて，「公爵令嬢メリー」の中でペチョーリンは「世に私ほど過去の支配を受けやすい人間はないであろう」(VI, 273) と断言し，信念の論議についても医師ヴェルネルとの対話で自分が「やがてある美しい朝に死ぬだろうということ」とともに，「不幸にも或る不愉快きわまる晩に自分が生まれ出たこと」(VI, 270) を述べている。そしてペチョーリンは，青春時代を迎えるやあたかも半生半死になったような，それまでの生い立ちのおのが「墓碑銘」をメリーに物語る個所において，幼いころ初め自分のものであった謙遜が自閉的になり，善悪に対する素直な感覚が執念に変り，自尊心が嫉妬に変り，人びとに対する愛が憎しみに変り，正直が嘘つきに変ったのも，すべては取りまく世間からの理由なき非難，侮辱，軽蔑，無理解，不信によると説明している。「僕の無色彩の青春は，自分自身と世間とに対する闘いのうちに過ぎてしまった」(VI, 297)。

もちろん，この「精神的不具者」としての絶望の告白は，男性からの愛の告白に無経験なメリーの無垢な心に意識的に打ち込まれた「爪牙」であるから，文字通りの告白とは受け取れないかもしれない。しかし同様の回想は，さきに触れたように，ペチョーリンのではないがレールモントフの抒情詩のいくつかに見いだされるところである。例えば，同じころ書かれた有名な詩「思い」(1838) には「嘲笑された情熱への不信によって，こよなき希望と気高き声を近しい者や友人たちからねたましげにかくしつつ，……快楽の盃に触れるや否や，だがそれによって青春の力を貯えることはなかった……」(II, 113) という詩句がある。しかしそれだけではない。ペチョーリンがその「手記」の「公爵令嬢メリー」の中で，ただ自分一人の貴重な思い出のために書きつけた部分にも同じ内容のものを見いだ

18) 前掲拙論，第 II 節参照。

すことができる。すなわち「悪は悪を生む。初めて味わされた苦しみは，他人を苦しめる快感についての理解を与えてくれる」(VI, 294)。また，決闘の前夜の日記においても，あらためて自分の過去のすべてを繰りひろげ，若くして「高尚な志向の焔，人生の美しい花を永遠に浪費してしまった」(VI, 321) と述べている。

このようにして，当時同世代のロシア貴族青年が高い理想への限りない希望にあふれ，それを追い求めた「青春の初期」ののちに深い幻滅と絶望に陥り，以後倦怠きわまりない生活に対する嫌悪を強いられた事情が，ここにはよく示されている。同じ頃の詩句「われらはあざ笑うが如く来し方を見やりつつ，幸福もなく栄誉もなく墓場へと急ぐ」(II, 114) も「手記」の中のペチョーリンに直接通じるものである。それでは，そのような絶望と倦怠のうちにおけるペチョーリンにとって，グルシニーツキーのバイロニズム，医師ヴェルネルのマテリアリズムは，更に生きるためのいかなる打開策を与えるものでありえたであろうか。

IV-1

短篇「ベーラ」の中には，カフカースに長年勤務している素朴な二等大尉マクシム・マクシームィチが25歳のペチョーリンから，自分は未開のチェルケス娘ベーラの粗野な愛にもペテルブルクの貴族娘のコケティッシュな愛と同様の倦怠を感じる，もはやヨーロッパ以外のどこかへ旅立つ以外には自分の空虚な生活に残された抜道はない，というようなことを告白され，それ以来，首都ペテルブルクの最近の青年たちの間にはこのような「倦怠の流行」でもあるのだろうかと疑っている個所がある。そして，話相手の旅行記記者から，それはイギリスから持ち込まれたバイロニズムの流行なのだと説明されている。その個所から推して考えると，一見ペチョーリンはそのような流行児バイロニストの一人でもあるかのようにも思われる。しかし，それは素朴なマクシム・マクシームィチの頭の中ではそうなるのであって，事実彼がそうであるわけではない。なぜなら，流行のバイロニストの典型とも思えるグルシニーツキーに対して，彼がその仮面をはぐところにこそ，中篇「公爵令嬢メリー」におけるペチョーリンの役割の一つがあるからである。ペチョーリンにとってグルシニーツキーは，要するにバイロン風の「小説の主人公」になりたがって，故意に非運のしるしである兵隊外套をまとって女性の関心を引くことばかり考えている男であり，だがいったんその「悲劇好みのマント」を脱げば常識的で臆病な，しかも人間の弱さを本当には何も知らない青二才なのである。ペチョーリンがグルシニーツキーのメリーに対する憧憬にも似た恋慕の情を知りながら，あえてそれを破産に導くのも，バイロン的な「甘い誤解を破ろうとする……あのいやらしくはあるが打ち克ちがたい感情」(VI, 293) によるのである。同様にまた他方，ペチョーリンは，バイロンを愛読するメリーが，その「小説の主人公」の型にとらわれて男性を見ることの迷いを打ち砕くのである。

しかし，「小説の主人公」であることの幻想を打ち砕くペチョーリン自身に，彼の反省すべき問題として残されたものは，いったい何であろうか。それは，自分の演じている役割が，それにもかかわらず，小説の作者，すなわち「小市民悲劇か家庭小説の作者，或いは『読書文庫』のための物語供給者の仲間」(VI, 301) なのではないか，ということである。この問題に対してペチョーリンは，「どうしてそれを知ることができよう」(VI, 301) と言

うだけで，直接明確な答えを得ていない。示されているのは，次のような一般的な考え方である。すなわち，「自分の生命なら，いや名誉でさえ，20回も賭けてもかまわない……が，自分の自由を私は売らない。ではなぜ私は，かくも自由を尊重するのか。私にとってその中に何があるのか……私は何に向かって自分を準備しているのか。私は未来に何物を期待しているのか。……実際全く何もないのである。これは何か生まれながらの恐怖，説明しがたい予感である。……何の理由もなく，くも，油虫，鼠を恐れる人があるではないか……」(VI, 314)。無目的の自由，このような矛盾した内的状況が，バイロニズムとの対決からペチョーリンの逢着したいつわらざる真実の心境であった。

IV–2

次に，医師ヴェルネルに代表されているマテリアリズムに関しては，どうであろうか。この医師は，保養地の夜会に集まる人びとの中で，ペチョーリンが論じ合い心から笑い合えるただ一人の知識人であった。「カフカースに勤めていた真に立派な人たち」(VI, 268)の仲間の一人であった。この「人たち」とは当時その地に追放されていたデカブリストたちのことであると解されている[19]。彼らのすべてがマテリアリストであったわけではないが，ヴェルネルは医師として「死体の血管を研究するように，人の心のすべての生きた琴線を研究し」(VI, 268)，それに基づいてグロテスクな真実を語り，現実の事態の進行を予見する口の悪いマテリアリストであった。注意すべきは，さきに一，二の例をあげて示しておいたように，ペチョーリンの考え方の中にも，このようなヴェルネルと一脈通じるものがあったという事実であり，しかもこれこそがペチョーリンのグルシニーツキーとの違い，すなわち「人間の弱さ」を自覚していることを示している点である。ペチョーリンによれば，「肉体の疲労は精神の不安を征服する」(VI, 280)，「私は音楽を医学的立場から愛する」(VI, 291)，「観念は有機的創造物である」(VI, 294)，「泣くことの原因もひょっとすると……空っぽの胃袋のせいであったかもしれない」(VI, 334)，「これでも精神が肉体に無関係であると言ってみるがよい」(VI, 323)。このような生理学的なマテリアリズムの考え方が，ペチョーリンのうちに，しばしば見いだされる。そしてこのような身体を伴った「人間の弱さ」を知らないグルシニーツキーの絶望はただ頭の中だけの夢のような幼い絶望であって，その「人間の弱さ」を知らない無知のゆえにペチョーリンにとっては滑稽なのであった。すなわち，「世には絶望すらが滑稽に見える人がいるものである」(VI, 304)。ペチョーリンは，このようなシニカルな唯物思想を，ヴェルネルと共有していた。しかし，それにもかかわらず，メリーをめぐって決闘沙汰にまで及んだ人間関係のもつれ合いののちには，ヴェルネルも，ペチョーリンにとってもはや心の友ではない。ヴェルネルは，人間の心理に関して生理学的なマテリアリストではあっても，社会的な危険を察知するや「責任の重荷をすべてわが身に引受ける勇気ある者から，憤怒をもって顔をそむけてしまう」(VI, 335)。ペチョーリンは最も賢明なものをも含めて「人間はこうしたものである」(VI, 335) と冷ややかに断言している。

それでは，このようなマテリアリズムとの関係においてペチョーリンに残された打開策

19) См. И. М. Тойбин, К проблематике новеллы Лермонтова «Фаталист»,— *Ученые записки курского государственного педагогического института*, вып. IX, 1959, стр. 32.

とはいえないまでも人間的現実の認識はいかなるものであったのだろうか。彼によれば，「若き心の属性」である情熱は，思想形成の初期の段階のものに外ならず，心はその成長とともに，ちょうど轟々たる瀑布から発した河川がやがて静かな流れに至るように，「すべてのことを明確に理解して，かくあらねばならぬことを確信する」ような「自意識の高い段階」(VI, 295) に至るものである。ここにおいて初めて，われとわが身を突き動かす情熱の嵐をわが生い立ちの運命としていたペチョーリンが深い幻滅と絶望ののちに，冷いが静かなリアリズムの知性に逢着していることがうかがわれる。しかし，これはふと行き当たったような思想の表現であって，強調されてはいない。

V

本稿は，ペチョーリンにおける矛盾した真の姿を明らかにすることを目的とし，そのために短篇「運命論者」の結論的部分を再解釈することを約束していた。以上の分析を前提として，今やその約束を果たす時が近づいてきたようである。

さて，周知のように，短篇「運命論者」の筋は，キリスト教のロシア人の間にもイスラムの運命論，予定性の思想を信ずるものがいるのではないかということをめぐる抽象的な議論のやりとりから始まり，ヴーリッチの異常な事件ののちに，運命や予定性についての「形而上学」「抽象的思想にとどまることを元来好まない」(VI, 343) ペチョーリンが，はからずも引きこまれた占星術的な錯誤から脱して，死を賭けた或る危険な行動に移る仕組みになっている。「公爵令嬢メリー」におけるペチョーリンは，これまで述べてきたことからも明らかなように，自分が現に今このような倦怠の生を生きざるを得ないのも，すべて「おろかな生まれ」(VI, 307)，「幼時からの運命」(VI, 297) によるものと考え，決闘の前夜にも明日の命がどうなるかは「どちらにしてもそうきめられたことなのだ」(VI, 323) と言っている。そうだとすると，短篇「運命論者」のその運命論者とはペチョーリンのことに外ならないようにも思われる。しかし，実は，その短篇において，ペチョーリンを運命論者と解することには少なからず無理がある[20]。ペチョーリンにとっての問題はむしろ，運命論，イスラムの予定性，キリスト教の神の裁き，マテリアリズム等々を含めて，当時貴族青年の間に盛んであったあのさまざまの信念についての抽象的な「哲学的，形而上学的」(VI, 269) 議論の真偽，有効さにあったように考えられるのである。医師ヴェルネルと交わした信念についての形而上学的な会話はすでに過去のものであり，今やペチョーリンは「運命論者」におけるあの生死を賭けての冒険的な行動ののちに，次のように結論するのである。すなわち，「こうしたすべてのことのあとでは，運命論者にならざるを得ない気がする。しかし自分が何かを信じているかいないかは，正確には誰にも分からない。……それに，錯覚や考え違いをいかにしばしば信念と取りちがえているか……私は一切を疑うことを好む。この知的傾向は，性格の果断さを妨げはしない。——反対に，私に関する限り，私を待ちもうけているものの何かが分からない時，私は常にいっそう勇敢に前進する。死以上に悪いことは起こるはずがないし，しかも死は避けがたいものなのだ」(VI, 347)。さきの無目的の自由は，ここでは果断な行動への意志にまで押し進められてい

29) 前掲拙論，第 II 節参照。

る。さきの矛盾した内的状況が，果断な外的行動を要求しているといってもよい。

さきにバイロニズムとの関係においてペチョーリンに残された道が，未来に対する期待の絶無にもかかわらず生命よりも自由をとること，換言すれば，無目的の自由という矛盾した内的状況においてなおかつ自由を守ることにあることが見られた。また，マテリアリズムの抽象的な論議の末にペチョーリンに残された認識は，荒れ狂って幻を追い求める情熱を越えて現実の理解に基づく，なすべきことの確認にあることが見られた。これらから導き出されるペチョーリンにとってのあるべき生活の唯一のあり方は，「自意識のこの高い段階」に立って自由を追い求めることにある。ペチョーリン自身このことを次のように表現している。すなわち「常に警戒して，一瞥，一語の意味をとらえ，計画を察知し，陰謀を打砕き，だまされたふりをして，突如一撃のもとに，狡知と奸計からでき上った巨大な労作である建築物を覆えすこと――これをこそ私は生活と名づけるのである」(VI, 304)。本稿で主題としてとりあげた前掲の「運命論者」の結論的部分も，このような方向にそって解釈されるべきであろう。しかし，その解釈は，以上に分析したようなペチョーリンにおける「矛盾した」真実のその内的な矛盾によるみずからの発展において再解釈されたものでなければならないであろう。

Противоречивые правды в Печорине

Кадзуко Идэ

В настоящей статье автор ставит своей целью разъяснение 〈неопределенности〉, 〈противоречий〉 в характере Печорина, указанных В. Г. Белинским. С этой целью, автор пытается вновь истолковать практический вывод Печорина в «фаталисте» посредством изложений его характера в «Тамани» и «Княжне Мери». Этим самым раскрывается как переходит романтическое понятие судьбы Печорина как 〈героя романа〉 к реалистическому понятию судьбы Печорина как 〈героя времени〉. Этот переход основан на развитии противоречий в идеях Печорина.